

# 原爆文学研究会報

## 第五七号

原爆文学研究会 二〇一九年三月

封印を解いて

大牟田 聡

父が亡くなったのが二〇〇一年。三年後母が住まいを移し、高速建設予定地にあたる広島の実家は立ち退きを迫られていた。誰も住まない家はあつという間に荒廃する。

大阪で働く私は、立ち退きはやむを得ないと感じていたが、父が遺した膨大な資料や文献の山を前に暮れていた。

一九三〇年生まれ父・大牟田稔は、広島大学卒業後、長く地元の新聞記者として被爆者や核の問題に取り組み、退社後九〇年代には広島平和文化センターの理事長を務めた。雑多な資料の山には、父が関わった原爆小頭症の会（「きのこ会」）の記録をはじめ、ヒロシマに関わる戦後五五年の文献・資料、それに原爆文学もほぼ網羅されていた。ただ整理はほとんどできていない。恐らく本人も入院後半年でこの世を去るとは思っていなかったに違いない。

まがりなりにも大阪の放送局で長く報道に携わっていた私には、そこに重要な資料が埋もれていることくらいはわかった。個人の資料は、散逸してしまえばそれで終わりだ。関心のない者が見れば、単なるゴミの山にしか見えないだろう。とはいえ途方もない量の資料を大阪に持ち帰ったとしても、置き場に困り、持て余すのが目に見えている。ジャーナリストや研究者、それでもできれば若い世代に活用されてこそ初めて資料は生きるはずだ。

そう考え、私はあちこちに相談を持ちかけたが、なかなか色よい回答は返ってこなかった。そりゃそうだ。父は生前、原爆文学資料を引き受ける文学館すらない広島の実状を嘆いていた。手つかずの大量の資料を

託せるところなど簡単に見つかるはずがない。とりあえず少しでも整理を始めようと広島市内の事務所を借り、そこに一部の資料を持ち込んだが、全く先行きが見えなかった。

ところが、〇四年夏、たまたま参加した私の出身学部である広島大学総合科学部の同窓会で思いがけない出会いがあった。

広島放送局に勤める友人が紹介してくれた、広島大学文書館のK館長（当時総合科学部助教授）が「いいですよ、全部引き受けますよ」と快諾してくれたのだ。この力強い言葉には、大げさではなく本当に涙が出そうだった。K館長はその時、まさか大学まで軽トラックで何往復もすることになるとは思っていなかっただろうけど。

その後、五万点をはるかに超える父の資料は八年余に及ぶ分類・整理を経て目録化され、文書館で保存されている（目録は広大本文書館のHPで公開されている）。

一八年末に福岡で開かれた第五七回原爆文学研究会で、オックスフォード大学の歴史学研究所博士課程に在籍するキアラ・コマストリさんが発表した「手記集『原爆に生きて』と山代巴」、大阪大学の宇野田尚哉教授の報告『「この世界の片隅で」の成立過程——大牟田稔資料を手がかりとして——』は、いずれも直接的、間接的にこの時に文書館に寄託した資料を手がかりとしたものだった。

実は、文書館に寄託した資料の中身について私は殆ど何も知らない。父が沖繩の被爆者に関するルポルターージュを書いた『この世界の片隅で』（山代巴編・岩波新書 一九六五年）の資料や、学生時代父と一時起居を共にしていた川手健（一九三一〜六〇）の遺したノートなどについてもうっすら知っていた程度だ。

だから会場で映し出される資料は、初めて見るものばかりできわめて新鮮だった。と同時に、ようやく父の遺したものが広島島の戦後研究に活用され始めたという実感が湧いてきた。

『この世界の片隅で』は、編者の山代巴が前書きに記しているように、広島と東京のジャーナリストや作家らが集まって活動した「広島研究会」の取り組みの成果だった。この「広島研究会」そのものは一九六四年に結成されたものだが、それは川手健や山代巴が一九五二年に結成した「原爆被害者の会」の取り組みを引き継ぐというものだ。「原爆被害者の会」はさらに遡れば、『原子雲の下より』（一九五三年）をまとめた「原爆の詩編纂委員会」に母体を求めることができる。

宇野田氏の報告のなかにあった「広島研究会」の規約には「この会は研究体であつて運動体ではない」と敢えて記されているが、この一文の意味はまさに川手自身の問題意識にほかならない。政治的立場からではなく、一向に救済されない被爆者ひとりひとりの声をどうすくいとるか、それこそが一九六〇年に自死してしまう川手の徹底した基本姿勢であり、それが「広島研究会」にまで引き継がれていったのだった。

父の筆跡による当時のやり取りのメモを見ながら、当時の表現活動が社会状況と分かちがたく連関していたことを改めて痛感した。

そしてそこからは、戦後間もない時期の若者たちの「未来を創るのは自分たちだ」という熱い思いも伝わってくる。今後父の遺した多弁な資料群は何を語りかけてくるのだろう。

——ただ「あの本、確か実家にあつたな」と思っても簡単に手に取ることではできない。そこはちよっぴり悔やんでいる。

## 第五七回 原爆文学研究会報告

二〇一八年二月二日（土）―三日（日）に、九州大学西新プラザ大会議室にて、第五七回研究会を開催しました。前回二日目が台風予



報で中止になったため、中尾麻伊香さんの研究発表「被ばくと奇形をめぐる科学と表象」と、坂口博さん、村上克尚さん、加島正浩さんによる「原爆文学」再読（吉本隆明『「反核」異論』が今回の一日目に繰り越されました。さらに、キアラ・コマストリさん、宇野田尚哉さんによるセッション「『原爆に生きて』から『この世界の片隅で』へ…山代巴を中心に」、二日目には韓国から来られた文学研究者の金文柱さんの発表「東アジアの桎梏の歴史と原爆の文明的な意味・韓国の原爆文学を中心に」と、山本昭宏さん、倉橋耕平さんの報告と中谷いずみさんのコメントによるワークショップ「歴史修正主義と一九九〇年代」が行われるという、盛りだくさんの研究会でした。狭義の「文学」にとどまらず、科学から歴史、政治、サブカルチャーへと領域を横断し、しかも一見つながりのないそれぞれの議論が往還しているようにも感じられる、原爆文学研究会ならではの刺激的な内容。参加者は両日も約五〇人と盛況でした。

初日の夜の懇親会で、初参加の若者が「この研究会は熱いと聞いてき

ました」と挨拶していましたが、たしかに今回も、両日とも白熱した議論が展開されました。議論が熱い、という理由で若い世代が集まってくるのは、研究会として誇らしいことだと思います。

奇しくも、福岡アジア美術館では、「闇に刻む光——アジアの木版画運動——展という、原爆文学研究会の問題意識にも通底する、政治と文学、芸術の領域を横断していく「熱い」展覧会が開催中でした。研究会の前後に足を運んだ参加者も数多くいたようです。

#### ◇ 研究発表

### 被ばくと奇形をめぐる科学と表象

——一九五〇年代の原爆映画を中心に——

中尾 麻伊香



被ばくと奇形はどのような関連性を持つものとして捉えられ、語られてきたのだろうか。とりわけ放射能の恐怖が広がり、原水爆禁止運動が起こる一九五〇年代、被ばくと奇形をめぐる科学知識は、それらの運動のなかでどのように伝えられたのか。本報告では、モンスターや奇形をめぐる思想史・科学的背景を概観した後、一九五七年に公開された亀井文夫監督の『世界は恐怖する…死の灰の正体』に焦点をあてて、被ばくと奇形をめぐる言説と表象を検討した。

『世界は恐怖する』は、ビキニ事件から三年後の一九五七年、核実験によって生成される「死の灰」の恐ろしさを世に伝えるために制作され、科学映画として世に出された。その宣伝はグロテスクなものとして奇形を前面に出したものであった。映画においては国内の科学研究室におけ

る高線量の放射線を浴びせて奇形を生じさせた動物実験の映像から、被爆地で生まれた奇形児の映像へと切り替えられていき、被ばくによって奇形児が生まれることが恐ろしい事実として伝えられる。しかしながら、動物実験で奇形が発生する被ばく線量と、被爆者の被ばく線量は異なり、被爆者が非被爆者と比べてより多くの奇形児を生むということは映画の公開当時から現在に至るまで科学的に証明されていない。映画の完成後、その科学的 content については複数の科学者から誤解を与える表現であるとの見解が表明されたが、それらの見解は多くの視聴者には届かず、「死の灰」の恐ろしさを広めるといふ監督の目的からしてこの映画は成功を収めた。

『世界は恐怖する』は科学を利用したプロパガンダ映画であり、被爆者差別を助長したものであった。亀井監督は被爆者を傷つけることを理解した上で、放射能の恐ろしさを訴えることを優先させたと述べている。ソ連で映画制作を学んだ亀井は、「モンスタージュの達人」といわれる。モンスタージュという手法は、連想をつなぎあわせ、メッセージを生み出すものであったが、この手法によって被ばくと奇形は結びつけられたのであった。『世界は恐怖する』は、核災害が起こるたびにリバイバル上映され、いまだにその影響は無視できない。奇形が忌避すべき恐ろしいものであるという価値観に依って放射能の恐ろしさを訴えるこの映画は、被爆者そして被ばくに関する科学知識が目的に応じて利用され、消費されていることを伝える一例といえる。

◇ セッション 『原爆に生きて』から『この世界の片隅で』へ…山代巴を中心に

### 『原爆に生きて』と山代巴

——ジェンダーの問題に着目して——

キアラ・コマストリ

# 『この世界の片隅で』の成立過程

——大牟田稔資料を手がかりとして——

宇野田 尚哉



『荷車の歌』（筑摩書房、一九五六年。のち映画化・舞台化）の著者として知られるようになる戦後の山代巴（一九一〇～二〇〇四）にとつて、すくなくとも東京に転居する一九六〇年代前半までは、その主要な課題が農村女性のエンパワーメントにあったこと、そしてその活動の基盤が自身の出身地域でもある備後（広島県東部）の農村にあったことははっきりしている。しかし、一九四五年一月に占領軍に呼び出されて被爆後まもない広島を實見して以後、被爆地広島との関わりが山代巴にとつて重要な意味を持ったこともまた疑いない。

本共同研究報告は、山代巴の二つの編著、すなわち『原爆に生きて』（三二書房、一九五三年）と『この世界の片隅で』（岩波新書、

一九六五年）を中心に据えつつ、被爆地広島との関わりという視座から、山代巴とその年少の仲間たちの営みに光をあてることを意図したものである。なお、本共同研究報告が重要な資料的基盤としたのは、広島大学文書館所蔵の「大牟田稔関係文書」であり、いまだ十分に活用されていないこの資料群の分析に着手したこともまた、本共同研究報告の問題提起の一つである。

敗戦後に山代巴が活動の基盤としたのは前述した通り備後の農村であったが、大村英幸、峠三吉らを担い手とする広島運動とも密接な連絡を保っており、しばしば広島を訪れていた。とりわけ、一九五二年三月に峠三吉が喀血・入院したのちには、請われて広島に滞在し、若い活動家たちをまとめつつ東京の出版社との折衝にあたるなど、年長の指導者としての役割を果たした。この時期、川手健（一九三一～一九六〇）をはじめとする若い活動家たちの献身的努力によって、原爆の詩編纂委員会編『詩集 原子雲の下より』（青木文庫、一九五二年九月）、原爆被害者の手記編纂委員会編『原爆に生きて——原爆被害者の手記』（三二書房、一九五三年六月）がまとめられるが、両書が刊行に至るまでには山代巴の尽力があった。

コマストリ報告は、「我々が被害者の家を直接訪問してお願いし、書けない人々のは代筆してもいい、発表の機会に恵まれない人々の、手記を書かれることに重点をおこう」という方針で編纂された『原爆に生きて』を検討の対象とし、同時代の他の手記集と比べると女性の割合が高いことを指摘して、同書の編纂過程で山代巴の果たした役割が大きいことを明らかにした。さらに、同書所収の特徴的な手記である山野音代「友の手紙」を子細に分析し、「山野音代」は山代巴の筆名であると推定するとともに、沈黙を強いられていた原爆被害者を組織化し手記集を編纂するという経験が、沈黙を強いられている農村女性から言葉を引き出し力を与えようとする彼女の農村における営みにも大きな示唆を与えたと論じた。

山代巴の若い盟友で、「原爆被害者の会」の結成（一九五二年八月）や『原爆に生きて』の編集刊行に献身した川手健は、一九五五年八月の原水爆禁止世界大会以降、原水爆禁止運動が政党や労働組合に主導されるようになっていくなかで周縁に追いやられ、一九六〇年には自死を遂げてしまうことになる。一九六四年、その原水爆禁止運動が中ソ対立を背景として決定的に分裂するなか、山代巴・大牟田稔（一九三〇～二〇〇

一)らかつての川手健の仲間たちは、被爆者に寄り添おうとした「故川手健の方法」を強く意識しながら「広島研究会」を組織する。当事者たるべき被爆者から遠く離れたところで混迷を深める原水爆禁止運動の現状に対する強い批判を含蓄しつつ、この「広島研究会」の研究成果としてまとめられたのが、ルポルタージュ『この世界の片隅で』であった。

『この世界の片隅で』は、「相生通り」（いわゆる原爆スラム）に暮らす人々、被爆した被差別部落に暮らす人々、胎内被爆した小頭症児とその家族、原爆孤児、沖縄の被爆者など、戦後二〇年間の復興から取り残されつつも懸命に生きる人々の姿をその内側から描いたルポルタージュであり、これらの人々の側から戦後日本の二〇年間を批判的に捉えなおそうとするきわめて重要な戦後二〇年論でもある。宇野田報告は、「大牟田稔関係文書」により、「広島研究会」の規約や研究会での議論の様子を紹介するとともに、同書が当初は「生きている証言」と題されており【IN UTERO】という章は最後の段階で急遽組み込まれたらしいことなどを指摘した。

報告後の討論においては、フロアから啓発的なコメントを得ることができたが、とりわけ大牟田聡氏からは、文字資料だけによっていたのでは窺い知ることのできない情報を含むコメントを頂戴することができた。記して感謝の意を表したい。

◇ 「原爆文学」再読6——吉本隆明『「反核」異論』

吉本隆明 「再読」を終えて

坂口 博

吉本隆明の「再読」を終えても、現実の核状況を考えるならば、鬱屈感・空虚感が増すばかりである。もちろん、吉本への批判で、それらが



言説を紹介した加島の、丹念な報告にもかかわらず、質疑応答を積極的に噛み合わせることも出来なかった。何が問題か、まだ考え続けている（最大問題は、現在の資本主義社会を、帝国主義段階から、より高度な消費資本主義へ移行したと「解釈」したとき、それは吉本として批判Ⅱ否定なのか、受容Ⅱ肯定なのかであろう）。

一九七〇年前後に青春期を迎えたひとりとして、吉本の文学・政治にわたった批評の影響は強い。「世代」論で、すべてが解釈できるとは思わないが、資本主義批判だけでなく、「社会主義」国家批判にも同感してきた。今回は、八二年以降の名著を辿ることで、三題漸のように、「三割、思い違い、シモーヌ・ヴェイユ」として、ざっくりとまとめた。

「三割」は「南島論」（一九七〇年）から。ここは「神話・古代史研究者」と断わっているが、普遍的な研究者・思想家にも通じる事柄として受容してきた。したがって、吉本自身も「三割」打者と考えた。散文詩『言葉からの触手』は、チェルノブイリ事故直前の表現。自然科学を「思い違い」の例外とする根拠が、よくわからない。科学信仰といえる世界ではないのか。シモーヌ・ヴェイユを晩年の吉本は、よく読んでいたようだ。ソ連邦解体あとで、レーニン・トロツキー的革命観を超える思想を、初期ヴェイユに見るが、それは保留しよう。ただ、「ヴェイユの貫いたこと」（二〇〇八年）における「自らの信念の強固さ」を「立派な思想」と語る言葉には、期せずして同感した。思想家というのは、「思い違い」

であっても安易に訂正せず、主張を変えない思い込みの強さにあると言える。その意味では、核に対しても原発に対しても、思い込みを貫くことで、吉本は立派な思想家といえよう。あとは、その思想的主張や内容が三割に入るか否かである。その判断は、「読者」にゆだねられる。少なくとも、再読提案者は否定的に把える。

◇ 「原爆文学」再読6——吉本隆明『「反核」異論』

## 交わらなかつた議論

——吉本隆明『「反核」異論』異論——

村上 克尚



私の報告の目的は、吉本隆明『「反核」異論』の論点を、1. 党派性の隠匿、2. 疑わしい実効性、3. 自立性の喪失という三点に絞ったうえで、それぞれの論点に対応する、署名に参加した文学者たちの言説を取り上げ、当時必ずしも交わらなかつた両者の議論について再考してみる、ということだった。

1. 党派性の隠匿という論点について。吉本は、ヨーロッパの反核運動は、ソ連がポーランドの「連帯」を潰したことを隠蔽するための運動であり、それに与する反核声明も「党派」的なもの「にすぎないと批判した。これに対し、渡辺一民は、反核運動はソ連の全体主義に屈するものだという批判は「自由か隷属かという二者択一を迫って、自由のための死をあえて選ばせるもの」だと反論した。また、加藤周一は、「右に行っても左に行ってもソ連を利用するかアメリカを利用するかというのは、冷戦の考え方があらゆるところに浸透したということ」だと批判した。

2. 疑わしい実効性という論点について。吉本は、「現在の段階で、かれら米ソ両国が国家の崩壊を賭けてまで、核をはじめとする兵器、軍需生産をやめるなどと到底かんがえられない」と、反核声明の空想性を批判した。これに対し、金石範は、選挙権のない在日朝鮮人でも、この反核声明に署名することで、アメリカとの軍事同盟にある全斗煥政権への反対の一票を投じ得る、という独自の契機を見出した。また、大江健三郎は、ドイツの街頭劇のなかに、ヨーロッパの反核運動と広島の記事が相互に賦活し合うサイクルが機能し始めていることを読み取った。

3. 自立性の喪失という論点について。吉本は、栗原貞子を批判しつつ、「お前はお前しか代弁することはできやしない」、「平穏な日常生活のなかで脳卒中の後遺症に苦しむ人も、老衰による自然死も、「ヒロシマ・ナガサキ」の被爆者の後遺症や、その死とまったく同等」だと批判した。しかし、反核署名の結実の一つである『日本の原爆文学』をめぐる長岡弘芳や大江の言説は、原爆文学の書き手は自立した主体ではなく、他者たちの声に貫かれた非・主体として存在することを証言する。また、すべての死が等しい重みを持つことは確かでも、それは原爆による死の固有性を無視する理由にはなり得ない。

以上の確認を通じて、吉本の『「反核」異論』は、スターリン主義＝全体主義を乗り越えるために、個の「自立」を重視するという、それ自体冷戦構造に枠づけられた思想の帰結として、同時代の反核運動が生み出していた様々な連帯のありようを不当に見過ごしてしまっていたのではないかと結論づけた。

◇ 「原爆文学」再読6——吉本隆明『「反核」異論』

## 「三・一一」後に読み直す『「反核」異論』

加島 正浩



本報告は『反核異論』で展開された反核理念への批判を、東日本大震災以後の言説を踏まえた後にどのようなように読みなおすことができるのかを考察することを目的とした。そこで最初に『反核異論』で吉本が用いた「反核」理念批判の要点が①科学の進展をとめることはできず、科学で生じた問題は科学によって超克するしかない②原発の問題を科学／技術の問題のみに限定するという二点にあったことを確認し、そのような思考の枠組みが震災後にも原発を維持・推進しようとする言説のなかにみられることを指摘した。そのうえで吉本から震災後の原発肯定言説へと受け継がれた二点の思考の枠組みを乗り越えていくために、中沢新一と加藤典洋のテクストを取り上げ、特に加藤の『三・一一——死に神に突き飛ばされる』（岩波書店、二〇一一年一月）に注目した。

まず中沢が『野生の科学』（講談社、二〇一二年八月）で吉本の科学技術・原子核技術の展開を把握する思考がマルクスの自然史過程に基づくものであると理解し、原子核技術の必然的な展開過程を考える際に吉本が考案にいられた要素を変更する必要があると指摘していることを確認した。次に加藤が中沢の指摘を踏まえ、『人類が永遠に続くのではないとしたら』（新潮社、二〇一四年六月）において、自然史過程の考察から経済的な理由や廃棄物の問題、また原発の「平和利用」が軍事利用にいつでも転用されうる事実などがこぼれ落ちるのは不自然であると指摘し、原発事故を踏まえて原発への評価を変える契機とするために、「市場、生産、産業から、経済、社会的な要因までを含み込んだ広義の自然史的な過程」から考察を行う必要があると提言していることを確認した。そして加藤が吉本の自然史過程に基づいた原子核技術への思考の幅を広げるために「ヒロシマ」の記憶を加味した『三・一一——死に神に突き飛ば

される』を分析した。

『三・一一——死に神に突き飛ばされる』ではまず、原発で死んだ死者の想いと被爆体験から、原発事故後と原子力の「平和利用」を考えようとする方向性が示される。そして原発を経験した日本社会が原子力の「平和利用」を受容した理由を「正義」が果たされず、不正義を耐えなければならぬ被爆者が、核の「悪」に対して「平和利用」を対置することで不正義を克服しようとしたという観点から説明しなおすことで、「平和利用」の試みが破綻していることが明らかになった原発事故後の現在においては脱原発に舵を取る必要があると論を展開していることを明らかにした。そして加藤が原発事故後に提示した被爆者の「祈念のかけ」から原子力の「平和利用」を考察し、段階を踏みながら脱原発に向かおうとする思考のあり方は、吉本の『反核異論』の相対化を試みた点で評価できるのではないかと結論づけた。

#### ◇ 研究発表

### 東アジアの桎梏の歴史と原爆の文明史的な意味・韓国の原爆文学を中心に

金 文柱



「埋葬された生と出口のない苦痛……韓国の原爆文学」の地理（金文柱、嶺南大学校 国語国文学科）は、「原爆文学」という命名すら見慣れない韓国の原爆文学の地図をはじめ描いたものである。韓国の文壇は、韓国国民の一般的な認識とおなじく、これまで原爆問題を韓国文学のカテゴリのなかに入れて考えたことがなかった。



原爆問題を取りあつた作品がなかったわけではないが、韓国の批評界や学界が原爆問題を本格的にとりあげることにはなかった。韓国原爆被害者が韓国政府と日本政府によつてすてられたまま最小限の生をいとなんできたように、かれらの問題は韓国文学において最小限の形象をもつて命脈をたもつてきたのであり、かれらの苦痛は可聴地帯のそとにおかれ意味のえられなかった音であつたのである。

韓国人原爆被害者の問題の本格的な形象化は、MBC放送局の前身にあたる文化放送のノンフィクションドキュメンタリーのプロデューサーであつた朴秀馥（パク・スポク、女性）氏の八年間の刻苦の努力によつて製作された『声もなく、名もない…韓国原爆被害者の三十年の記録』から始まったが、この労作の提起した韓国人原爆被害者の生が、文学的な形象をもつて注目をうけるようになったのは最近のことである。

今回の発表は、筆者がこれまで確認した韓国人原爆被害者にかかわる作品の内容と性格、そして各々の作品の意味をまとめたものである。「韓国の原爆文学」の地理を整理しようとしたこの発表では、六つの作品をとりあげた。許秀卿（ホ・スギョン）の『悲しさほどの肥やしはどこにあろうか』（一九八八、実践文学社）に収録された「原爆手帳連作」、高炯烈（ゴ・ヒョンヨル）の長編詩『リトルボーイ』（一九九五、ネックセス）、金政陽（キム・ジョンヤン）の長編小説『広島よ！さよなら！』（一九九五、亜細亜文化社）、金源一（キム・ウォンイル）の中編小説『広島の火花』（二〇〇〇、文学と知性社）、韓水山（ハン・スサン）の長編小説『軍艦島』（二〇一六、創作と批評社）、金玉淑（キム・オクスク）の長編小説『傷跡の花』（二〇一七、セウム）がその六つの作品である。韓国人被爆者の問題は、過去のものではなく、韓国社会が解いていかないといけない生々しい現在の問題であり、韓国と日本の過去の歴史を解いていくうえでも非常に重要な基地である。その意味で、韓国人被爆者の問題は、韓国文学がより大事にしながら、実践的な関心をもつてとりくむべき文学的な拠点であることを強調したい。

（翻訳 崔範洵）

## ◇ワークショップ「歴史修正主義と一九九〇年代」

### 報告要旨

山本 昭宏



報告では、長崎原爆資料館の開館（一九九六年四月）前後に起こった、「加害展示」をめぐる論争と運動を整理するとともに、「加害展示」が社会問題となる過程を辿った。報告の前提には、「歴史修正主義」に関する研究が、慰安婦、「南京事件」をめぐる議論に集中しており、原爆に関してはゆるゆるぶんな議論が行われてこなかったのではないかという問題意識がある。

注目したのは、議論に参加した諸々のアクターである。特に重視したのは、中心メンバーが『正論』に寄稿するなどしていた「長崎の原爆展示をただす市民の会」である。この会の、中心メンバーは、一九二〇年代生まれであり、なんらかのかたちで戦争を経験した世代による運動だったことがわかる。彼らの運動は、ネット以前の「草の根保守」を担った世代による、「陳情」や「長文による抗議」という形式をとった。そこに、日本会議系の雑誌『祖国と青年』が合流し、『正論』が「応援」することで、全国の保守・右翼団体のなかで長崎の展示問題がアジェンダ化していったのである。

九〇年代の長崎の原爆資料館をめぐる議論を確認してわかったことは、議論のアクターたちが、「東アジア／日本／アメリカ」という枠組みを強く意識していたことである。特に重要だと思われるのは、アメリカの原爆投下責任である。それを問うことなしに、「加害展示」だけを行うべきではないというのが、当初の「長崎の原爆展示をただす市民の会」の認



識だった。そう考えると、この会の運動において、以下の二点が考察に値しよう。つまり、第一に「草の根反米ナショナリズム」がネット以前の時代において最後の盛り上がりを見せたという点。第二に、地域と中央論壇の相互交流のなかで、長崎から歴史認識問題を焦点化した点、である。

もちろん、九〇年代の議論・運動が対話的だったとは言えない。しかし、「東アジア／日本／アメリカ」という枠組みのなかで原爆投下を捉える視点があつたことは間違いがない。しかしながら、議論・論争の過程で「昭和期日本の東アジアへの「侵略」「加害」の評価」のみが「加害展示問題」として問題化され、当初のアメリカの原爆投下責任の問題は後景に退いていった。この点に、九〇年代以降の歴史認識問題が、マスメディアを通して社会の議題となる際のジレンマが集約的に表れていたと言える。

#### ◇ ワークショップ 「歴史修正主義と一九九〇年代」

### 歴史修正主義の背景と普及

——一九九〇年代のメディア文化——

倉橋 耕平



報告者は、刊行した『歴史修正主義とサブカルチャー』にもとづいて、歴史修正主義の登場の背景と普及過程について報告した。歴史修正主義は、歴史学の領野では、一九六〇年代以後のアメリカの新左翼による伝統的アメリカ史学批判のことを指すが、一般にはホロコースト否定論(欧米)や南京事件否定論のような歴史否認論や

「通俗歴史主義」(岡部牧夫)のことを指す。報告者の関心は、後者であり、この立場は、学会や学術出版からは距離を取られ、商業出版において展開された。具体的には、保守論壇誌、雑誌、マンガなどを発表・拡散していった。『正論』誌や小林よしのりのマンガは、九〇年代に読者投稿を重視するようになり、読者の参加を促し、読者の困い込みを行なっていた。そうした読者との関係が自分たちだけで共有できる集合知を作り上げ、自己強化していった(この点は、第一報告者の山本昭宏の報告の『正論』における長崎原爆資料館批判の投稿とも関連する)。また、論破を志向する「デイベート」が歴史論争に用いられ、それらは自己啓発書を媒介に大衆に膾炙としたとみられる。そのような類の歴史関連書、日本論の書籍が、スピリチュアル系出版社とも強く結びついていることを指摘した。

コメンテーターの中谷いずみ氏からは、新右翼活動との連続性、新自由主義と歴史修正主義との関連性、資本(出版市場)と政治(与党)がどのように扱ったのか、といった重要な論点が示された。会場からも多数の質問が寄せられた。日本では九〇年代の不景気がなぜ国家批判(国家への不満)ではなく国家賛美になるのか、九〇年代とそれ以前の歴史修正主義との違い、五五年体制崩壊でなにが変わったのか、自発的な参加が国家への自発的隷従と結びつくのはなぜか、谷口雅春がそもそも生命／スピリチュアル／国家を結びつけていたわけだが、どのように九〇年代にブリッジするのか、右派論壇には天皇の証言利用はあるのか、といった質問が出された。いずれも見逃ごせない論点であり、多くの刺激を受けた。

#### 機関誌 「原爆文学研究」 第一八号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一八号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の

他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿ください。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一九年九月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付しての投稿の場合は同年九月三〇日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八八〇―八五二〇 宮崎市船塚一丁目一―二

宮崎公立大学人文学部 楠田剛士研究室

## 彙報

第五七回 原爆文学研究会

○日時 二〇一八年二月二二日(土)、二三日(日)

○会場 九州大学西新プラザ大会議室

【一日目】

○研究発表

被ばくと奇形をめぐる科学と表象——一九五〇年代の原爆映画を中心に  
中尾麻伊香

○セッション『原爆に生きて』から『この世界の片隅で』へ…山代巴を中心  
山代巴

報告1 『原爆に生きて』と山代巴…ジェンダーの問題に着目して

キアラ・コマストリ

報告2 『この世界の片隅で』の成立過程…大牟田稔資料を手がかりと  
宇野田尚哉

○「原爆文学」再読6——吉本隆明『「反核」異論』

坂口博・村上克尚・加島正浩

【二日目】

○研究発表

東アジアの桎梏の歴史と原爆の文明史的な意味…韓国原爆文学を中心に  
金文柱(通訳 崔範洵)

○ワークショップ「歴史修正主義と一九九〇年代」

報告 山本昭宏・倉橋耕平

コメント 中谷いずみ

## 編集後記

本研究会の会員である加納実紀代さんが、二月二日にお亡くなりになりました。『天皇制とジェンダー』、『銃後史とジェンダー』など数多くのご著書で女性史研究を進められ、個人的には広島で被爆後、一三歳で香川県善通寺市の「原爆の図展」をご覧になり、『原爆の図』について鋭い批評をされていたことも印象に残っています。もうお話を伺うことができないのは、残念でなりません。

さて、今回の第五八回原爆文学研究会は三月三十一日(日)に、広島大学東千田キャンパス東千田校舎A棟一階共用講義室にて開催されます。モハンマド・モインウッディンさん、東村岳史さんの研究発表を予定しています。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。(岡村幸宣)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四―〇一八〇 福岡市城南区七隈八一―一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>